



Title	「クラフト創造都市」金沢に関する研究：「工芸」の多義性を基軸として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	澤田, 拳志
Citation	北海道大学. 博士(観光学) 甲第13982号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78331
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takashi_Sawada_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：澤 田 拳 志

審査委員	主査 教授	清 水 賢 一 郎
	副査 教授	西 川 克 之
	副査 教授	山 村 高 淑

学位論文題名

「クラフト創造都市」金沢に関する研究

——「工芸」の多義性を基軸として

本論文は、金沢市を対象として、同市が掲げる「クラフト創造都市」を代表するものとしての「工芸」に注目し、幕末・明治維新时期以来、「工芸」が創造都市政策の主軸に据えられるに至るまでの歴史的な文脈と経緯、そしてそれが金沢の文化都市政策にとって如何なる意味合いを持つのかを、特にその文化都市政策における理念と実態に焦点を当て、批判的検討を通じて明らかにしたものである。

近年、文化・芸術を軸に都市の再生や活性化を図ろうとする動きが高まる中、創造都市 *creative city* と呼ばれる都市像・理念の台頭が見られ、UNESCO によれば世界各地で 180 を超える都市が創造都市を標榜した取り組みを行っている。しかしその実態たるや、一つのブランドの名の下、文化・芸術を利用した新たな都市間競争が繰り返され、旧来の都市政策が意匠を変えて反復されているようにも見える。いまあらためて 20 世紀型の都市政策の是非を見つめなおし、これからの都市のあり方を問い直すべきではないか。これが本論文の問題意識の根底をなす問いである。しかしながら、創造都市に関するこれまでの研究は事例紹介が多くを占め、具体的な政策内容や政策導入に至った経緯、その意義等の詳細な検討が待たれていた。

UNESCO 認定の「クラフト創造都市」であり文化庁による文化芸術創造都市にも選出され、文化都市として自他共に任じる金沢市を分析対象とする本論文は、そうした研究史に対し、都市史、都市政策、文化政策等の諸分野、及び金沢史の既往研究を踏まえ、それらを接合したアプローチをとることにより、一定のボリュームをもった詳細な事例研究となっている。

論文の全体構成は、第 1 章序論、第 2 章の先行研究レビューを踏まえて本研究の視座を定めた後、第 3 章で金沢市における幕末維新以来の産業政策と文化政策の歴

史をトレースし、第4章で「クラフト創造都市」金沢の軸である「工芸」の歴史的展開を整理し、「工芸」が含む意味合い及び現在の「工芸」を取り巻く状況と課題を明らかにし、続く第5章で前二章を重ね合わせ、相互に照射する形で立体的に検討を加え、さらに第6章では現在進行形で展開されている「工芸/KOGEI」をめぐる動向へ射程をのばし、多様なアクターが都市金沢の方向性をめぐってせめぎあう様に迫っている。

本論文の成果は、金沢という都市の歴史的変遷と、そこにおいて常にシンボリックな参照軸とされ続けてきた「工芸」という具体的な事象の歴史的変遷とを〈二重写し〉にする研究デザインにより、大略以下のような点で示された。

(1) 「工芸」という、「美術」と「工業」の境界に位置し、多義的な要素を背負った独特のジャンルが、時々々の社会が直面した外的・内的な社会条件との関係において、特に近代的な産業社会化の進展に伴う「作品 vs. 商品」という異なる方向性に向き合わざるを得ないアンビバレンスを備えていたことを明快に検証した。

(2) それが都市金沢の、明治維新时期までは日本の中心的な都市の一つでありながら、「裏日本」という地政学的な位置づけにより、また戦後は非戦災都市という独特の性格をもつ中で、「伝統（保存） vs. 革新（開発）」という異なるベクトルに対峙せねばならなかった、金沢という都市の姿と重なりと主張した。

(3) 「文化 vs. 経済/産業」、「伝統 vs. 革新」、「保存 vs. 開発」、「作品 vs. 商品」といった対立する分析軸を多層的に重ねあわせ、金沢の文化都市政策の理念と実態の齟齬や揺らぎ、その背後にある葛藤やジレンマを浮き彫りにした。

(4) 文化都市の成功例としてしばしば扱われる金沢の背後には、様々な偶然的な要因にさらされ、文化と経済の間で揺れた経緯があり、そうした紆余曲折の上に現在の文化都市政策もまた引き継がれてあると指摘した。

本論文は以上のような成果を持つ反面、口頭試問及び審査委員会では、歴史的展開をたどる際、戦前と戦後に分割された中間部（戦後初期）の記述の欠落により戦前から戦後への転換点における継承と断層が見えてこないこと、創造都市論をはじめ先行研究に対する論者の見解や立場が十分明瞭な形で示されず、いささか隔靴搔痒の感が否めないこと、一般的な観光研究への学術的位置づけに明瞭さを欠くこと、他都市との比較分析によるさらなる検証が必要であること等、厳しい意見も出された。

しかしながら、本論文は金沢都市史として随所で興味深い事実を示し、様々な偶発的素因に左右され都市のアイデンティティは常に揺らぎながらも、今日、一定の評価を受ける文化都市政策を展開してきた金沢のしたたかさや柔軟さをあぶり出している。それは、脱近代化社会における新たな競争的環境の中で地方都市が生き抜くために地域資源をどのように見直し価値づけることができるのか、またそれを観光資源に転化して地域内外の交流や協働につなげていくことができるのかを示唆する側面を有し、観光創造学の基礎研究となる一参照事例として一定の評価を与えることができる。

よって、審査委員会では博士（観光学）の学位を授与される資格があるものとして、本論文を合格と判断した。